

令和3年度1学期終業式校長式辞（令和3年7月19日リモートで実施）

今日で、令和3年度の1学期が終わります。昨年度の1学期終業式は、8月7日でした。今年度の終業式は日程的には、通常に戻りましたが、今年度も、コロナ禍の下での高校生活が続いています。

皆さんは、生活面、学習面、部活動、修学旅行等学校行事など多くのことで、制限・制約を余儀なくされ、数多くの悔しい思いがあると思います。

しかし、先ほどの表彰に見られるように、皆さん一人ひとりが、それぞれのありようで、学力も人間力も成長しています。特に、本校の生徒の伸び幅は突出して大きいと思います。

その要因として、私は、この朝日高校には、成長を促す場と人が存在していると考えています。このことに関連して、数学を例に、エピソードを三つ紹介します。

一つ目は、卒業生が執筆した令和3年の「受験記」からです。ここには、高校1年生4月のスタディーサポート3教科校内順位253番から東京大学に現役合格した先輩の体験が掲載されています。数学については、高3の夏の東大模試は1点だったそうです。

この先輩の皆さんに対するアドバイスは、「本質を捉えろ」ということです。そして、本質とは、教科書に載っている原理原則、基礎的な知識のことです。黙って教科書を読み込むのです。目の前のことに愚直に取り組むことの大切さが分かります。

二つ目は、ある卒業生の話です。この生徒は、1年生のとき数学の授業についていけなくなりました。授業中に指名されても、分からないので答えることができません。自信がなくなり、数学の先生の顔も見ることができず、質問したくても、職員室入ることもできない状況でした。しかし、2年生になって、数学の先生に質問や添削を依頼することができるようになりました。1年生でもしないような初歩的な質問にも、先生は丁寧に答えたくれたそうです。この先輩は言います。

「朝日高校に入学してよかった。数学は苦手だが、嫌いではなくなった。これからも数学嫌いな生徒が少しでも数学を好きになることを祈っています。」

決してあきらめないこと、自分が動けば、朝日高校の先生は必ず応えてくれることが分かります。

三つ目は、今年度から始めた数学同好会を中心とする「数学を極める学び」への取り組みです。希望者が、京都大学名誉教授・世界的な数学者である上野健爾先生から定期的に指導を受けつつ、大学レベルの問題を追究しています。参加者は、次のように言います。

「大学チックな内容は非常に興味深かった。単に問題を解くための力を付けるのではなく、数学の神髄？に迫るような時間でした。」「ほとんど分かりませんが、分からなくても楽しい。」自分が学んでいることの意味や意義を感じることで、学ぶことに楽しさを感じることの大切さが分かります。

朝日高校には、生徒を成長させることのできる、場と人が存在していることを、数学に関する三つのエピソードで紹介しましたが、皆さん一人ひとりは何のために、何をどこまで成長させたいのでしょうか。このことを考えるのはとても難しいことです。

6月の進路講演会では、本校に長く勤務し、進路課長を務めた則近彰先生が、朝日高校で生きるということは、矛盾を生きることになるかと述べられました。自由と自業自得（自主自律）、自分の大切さと他者の尊重（自重互惠）の矛盾を生きるのです。

しかし、矛盾を抱えて生きるということは、人生そのものではないでしょうか。そして、人生を生き抜くための武器となるのが、矛盾するもの同士のバランスをしっかりと取ることだと思います。数学をしっかりと学習することと、自分がなぜそうするのかという目的を考えることの両方が大切です。目の前のことに愚直に一生懸命取り組むことと、その意味や目的を考えることのバランスが必要です。そして、意味や目的や夢は、自分自身にとってと、他人や社会にとっての両方の要素があります。ここでもバランスが大切です。

私自身は、職業生活の終わりが近づき、自分が一番何をしたかったのかを考えることがあります。その一つは、高校生一人ひとりが前に向かう気持ちを少しでもつことだと思っています。この式辞もそのような気持ちで述べています。この夏の皆さん一人ひとりの成長を期待しています。

（県立岡山朝日高等学校 校長 竹田義宣）